

五月飾りや五月人形といえば、甲冑や兜の他に、武者人形を思い浮かべる人もいるでしょう。本連載では「鍾馗」（2020年9月号 vol.65）、「神武天皇」（2021年1月号 vol.67）について解説しました。今回は、端午の節句に武者人形が飾られるようになった理由と、武者人形の一つである太閤人形について調べてみました。

節句人形

素村なギモン



武者人形・太閤秀吉
江戸時代後期 京都製 高さ 26 cm
所蔵：吉徳資料室

武者人形の発祥

武者人形とは武者の姿をした人形の総称である。端午の節句に飾る人形の多くが武者の姿を表したものであるため、五月人形の別称でもある。甲冑をまとった武士だけでなく、桃太郎や金太郎などの人形も武者人形に含まれる。

端午の節句に武者人形を飾るようになったのは江戸初期から中期にかけてのこと。民間の五月飾りは幟や兜など、その多くが屋外に飾られていた。

中には兜の頂に造花や武者人形を乗せているものもあり、のちに兜から独立して飾られるようになったと考えられる。

屋外に飾られる武者人形は、見せることを目的とした等身大に近いほど大きなものもあった。しかし、度重なる奢侈禁令※などのためか、江戸中期以降は次第に小型化して雛人形と同様に屋内に飾られるようになった。

太閤と言えば、豊臣秀吉

武者人形は大將人形ともいう。京阪では「大將さん」と呼ばれ、甲冑などの五月飾りを指すこともある。大將人形は武者人形のうち、特に大將を表したものを指し、源義家や豊臣秀吉、応神天皇などが人形のモデルになることが多いが、特定の人物ではない武將を表現したものもある。甲冑を着用した姿や鎧直垂姿、狩衣姿で座ったり、床几に腰掛けたりしたものが多い。

上記画像は、武者人形のなかでも立身出世の代表とされる「太閤さん」こと豊臣秀吉をあらわした人形である。凛々しい表情で存在感のある佇まいから男児の健やかな成長を願う気持ちが伝わる。

「太閤」は摂政や関白の職を子どもや兄弟に譲った人のことを指す。「太閤」という官職は平安時代からあるが、江戸時代以降になると「太閤」といったら豊臣秀吉のことを指すようになった。

その理由は、豊臣秀吉は貧しい家の生まれから戦国武將となり関白、太政大臣となって豊臣政権を確立し、初めて日本の全国統一を成し遂げた人物であるため。豊臣秀吉をモデルとした人形は、太閤人形、太閤秀吉と呼ばれ、昭和戦中まで、出世の象徴として端午の節句に飾られる人形の代表格の一つだった。

※奢侈禁令……度を過ぎてぜいたくなこと。身分不相応に金を費やすことを禁止する命令